読み解くための
4つの視点

現場の教師は、次期学習指導要領から何を感じ取ったのか

2022年度に向けて自校の教育活動をデザインするためには、そのよりどころとなる学習指導要領を読み解くことが必要不可欠だ。その際、どのような視点で読めば、学習指導要領の理解が深まるのだろうか。VIEW21編集部では、全国の高校教師によるワークショップ型の読み解き会を実施。次期学習指導要領を読み、それぞれどのような点に着目したのか話し合ってもらい、その共通点を整理した。

現場の声から着目すべき点を見いだす

今号では、2018年3月に公表された高校の次期学習指導要領を読み解くために着眼すべき点を探るべく、全国の高校教師に集まってもらい、ワークショップ型の読み解き会を行った。読み解いたのは、「前文」と「第1章　総則（以下、総則）」、そして、各自が担当する教科のページだ。

新たに設けられた「前文」には、学校教育への期待と目標、学習指導要領の役割・趣旨が明記されている。また、抜本的に位置づけが見直された「総則」は、次の7つの項目立てとなり、教育課程の役割や編成、全教科の指導方針などが示された。

①高等学校教育の基本と教育課程の役割
②教育課程の編成
③教育課程の実施と学習評価
④単位の修得及び卒業の認定
⑤生徒の発達の支援
⑥学校運営上の留意事項
⑦道徳教育に関する配慮事項

このように、「前文」「総則」には次期学習指導要領の根幹が示されていることから、その読み解きが自校の今後の教育のあり方や教育活動を左右すると言っても過言ではない。

各教科・科目のページにも、変更点がある。「目標」は、資質・能力の3つの柱である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に沿って掲げられており、「内容」は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」に分けて明記されている。

読み解き会は下記に示した流れで進められた。参加した教師の声を交えながら、その内容をまとめていく。

写真　読み解き会では、疑問点などを付箋に書き、グループ内で共有した。

読み解き会の流れ

①参加者は事前に学習指導要領に目を通しておいた。

前文・総則

②【グループワーク】1グループ4人ずつの3グループに分かれ、疑問点、不明点を出し合った。そして、出し合った疑問点、不明点の解消をグループ内で行った。

③【全体発表】各グループの代表者が、自グループではどのような疑問点、不明点が挙がったのかを発表。グループ内で解消できなかった疑問点、不明点については、全体で協議した。

担当教科

④【グループワーク】担当教科に応じて「国語」「地理歴史・公民」「数学・理科」のグループに分かれ、担当教科の学習指導要領の「共感した点」「違和感を持った点」「疑問に思った点」を出し合った。

⑤【グループワーク】教科混合のグループにし、教科横断での共通点を探った。

⑥【振り返り】参加者個々に振り返りシートを記入。次期学習指導要領について、「ポイントとなる点とその理由、実現に向けての方策」「立ちはだかる課題とその要因、課題に取り組むための方策」をまとめ、各自全体に発表した。

「前文」「総則」を読み解く

「前文」と「総則」から、高校教育の理念と目標、そして指導の観点を理解する

「社会に開かれた教育課程」をどうすれば実現できるか

「前文」「総則」の中で、参加者がまず注目したのは、前文に書かれた**「社会に開かれた教育課程」**だ。

> **・前文**（1ページ）
> （前略）よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

その一節について、参加者から次のような見解が示された。

「地域からは学校や生徒に様々な期待が寄せられ、それを教育目標に反映させる学校は多い。地域と学校は直結しており、既に教育課程は社会に開かれているのではないか」

「『社会に開かれた教育課程』の上位概念にあるのは、実社会や実生活に役立つ学びだ。そうした学びを通じて、生徒は身の回りの問題に関心を持ち、積極的にかかわるようになる。その状態を実現する教育課程を目指しているのだと思う」

また、「勤務校周辺では、経済状況の厳しさから家庭や地域の協力を得るのが難しい。企業も少ないため、どのように社会と連携を図ればよいのか」といった課題が挙げられたが、他の参加者から地域教育コーディネーターの活用が提案された。

以上のような見解や課題を踏まえ、「自校に求められる役割を考え、地域事情も考慮しながら、校内で『社会に開かれた教育課程』の共通理解を得ることが、その実現には必要不可欠だ」という考えが示された。

「社会で役立つ知識」を実感できる「探究」とは？

「実社会や実生活に役立つ学び」に関連し、次に「**探究**」の話となった。

「学校での学びと社会との関連を実感させる教育活動は、全教科で行うことが望ましい。そうしなければ、生徒は自分に必要な学びとそうでない学びを分けてしまう」といった考えが示された。すると、「知識・技能を習得させてからでなければ、活用や探究はできないと捉える教師もいるが……」という疑問が挙がった。

それに対し、「総則」の記述を取り上げて、考えが述べられた。

> **・総則　第1款　2（1）**（3ページ）
> （1）基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。（以下略）

「この一節は、学びの順序が示されているわけではないと思う。知識・技能の『習得』と『活用・探究』は並行して進むものであり、活用の場面で自分に足りない知識・技能に気づいて習得したものはしっかり定着するし、その後の学習行動にも主体性が表れる。それを理解すれば、授業の質の転換を図れるだろう」

また、探究の内容について、「『探究』というと『研究』がイメージされやすいが、『探究』に求められるのは、自分の生き方や考えを更新するための活動だ。その生徒に応じた活動でよいと考えれば、どの学校でも『探究』は行える」と指摘。すると、「幼稚園の参観で、園児が『どうすれば滑り台で速く滑れるか』という課題を立て、話し合いながら様々な方法を試しているのを見た。学齢を問わず課題解決型学習はできるのだと実感した」という体験談が紹介された。

さらに、探究の中・高の違いについて、次のような見解が挙げられた。

> **・高校「総合的な探究の時間」**（641ページ）
> 第1　目標　探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> **・中学校「総合的な学習の時間」**（159ページ）
> 第1　目標　探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

「『総合的な探究の時間』の目標には『よりよく課題を発見し』とある

＊本文中に掲載している学習指導要領の抜粋は、2018年3月告示の「高等学校学習指導要領」、または2017年3月告示の「中学校学習指導要領」（いずれも文部科学省）。なお、黄色の網かけは編集部によるもの。

が、中学校の『総合的な学習の時間』の目標ではそれに言及されていない。高校では、自ら社会の課題を発見し、よりよい社会を築いていく態度を育むという趣旨が読み取れる」

観点別評価を行うために何をすべきか

そして、話題は「**学習評価**」に移った。資質・能力の3つの柱に基づき、学習評価の観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に再整理され、大学入試では学力の3要素を多面的・総合的に評価する入試への転換が図られようとしている。

「パフォーマンス課題では、評価方法を設定した上で授業づくりをしなければ、活動自体が目標になってしまい、生徒の学びが深まらない」

「定期考査などの総括的評価だけでなく、形成的評価も大切にしたい。生徒の形成的評価を積み重ねれば、生徒が自分の言葉で、自身の学びの成果を説明できるようになるだろう」

それらの発言からは、学習評価を工夫しなければならないといった課題意識がうかがえる。

担当教科を読み解く

資質・能力の3つの柱をバランスよく育むためにすべきことは

現行課程や中学校の課程と見比べて読み解くことも必要

続いて、担当教科別のグループとなり、各教科のページを読み解いた。

◎国語科

国語科グループでは、目標の1つに掲げられた「我が国の言語文化の担い手」という一節に着目した。

> **・高校「国語」**（24ページ）
> 第1款　目標　（前略）
> (3)言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

それは、国語での学びを、人生を豊かにするために生かせるようになることではないかと解釈するとともに、「例えば、短歌を詠むなど、古文の学習を日常生活に生かせるような指導にも挑戦したい」といった授業における課題も挙げられた。

さらに、中学校の学習指導要領と見比べて、「中学校では『正確』『適切』で、高校では『的確』『効果的』という記述になっている。高校では、その場によりふさわしい言葉を選べるような指導が求められている」といった見解が示された。

> **・高校「国語」**（24ページ）
> 第1款　目標　言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> **・中学校「国語」**（29ページ）
> 第1　目標　言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

◎地理歴史・公民科

地理歴史・公民科グループでは、学習指導要領のメッセージとして、「知識の理解を超えて、平和で民主的な社会の形成者に必要な資質・能力をつけてほしいということが伝わってくる」という見方を示した。

一方で、「『歴史総合』を始めとする歴史科目では、今まで以上に指導の軽重が求められる。その点を踏まえた指導計画をしっかり作ることが必要だ」といった課題も共有された。

◎理科

理科全般について、「『観察、実験』という言葉が何度も登場していた。双方の目的を明確にしないと、ただの体験で終わってしまう」といった懸念が示された。また、生物では、「生物は暗記科目だと捉えている生徒が多いので、扱う用語が減るのはよい」といった声も上がり、探究学習の実践例として、「『血液が固まる場合とそうでない場合があるのはなぜか』という多くの生徒が疑問に持つ問いを出したところ、自分の疑問を追究するため、生徒は意欲的に取り組み、その後の知識の定着度も高かった」といった取り組みが紹介された。

育てたい資質・能力から単元計画を立てる

次に、教科混合グループとなり、自教科での話を共有。そこでは、教科横断の視点で資質・能力を育む授業の実現に向けた課題が出された。

「知識を関連づけて活用する学び、実生活や実社会とのつながりを実

感できる学びの実現、さらに、学習評価や大学入試との関連性も考えると、問いを立てる難しさを感じる」

「育てたい資質・能力から各教科の単元計画や授業案をつくる重要性はよく認識できたが、単元計画の考え方がなかなか浸透しない」

一方、学校全体で資質・能力を育む体制づくりへの言及もあった。

「授業改善を管理職が主導してくれればよいが、自分にできることとして、まず自ら授業改善を図り、成果を発信して賛同者を増やしていくといった努力の積み重ねが、やがて大きな変化につながるのだと思う」

「育成を目指す資質・能力の共通理解がカリキュラム・マネジメントにつながるが、学校・学年・教科で学習指導要領について話し合う時間をまだ取れていない。教師個々の取り組みに終わらせないよう、研修の場を意識的につくる必要がある」

参加者の振り返りでは、「グループワークが自身の多様な気づきの場になった」「同じ学習指導要領を読んでも、重要だと思う点や解釈が違っていた。校内の共通理解のためにも、今回のような読み解き会は必要だ」といった声が上がった。

次期学習指導要領を読む際に持っておきたい4つの視点

読み解き会の内容と読者モニターの声（＊）を踏まえ、次期学習指導要領を読む際に持っておきたい視点を次の4つに整理した。

視点1　社会に開かれた教育課程

「社会に開かれた教育課程」は、学校教育目標、教育活動の内容、その具現化に向けたカリキュラム・マネジメントなど、学校教育のあらゆる面に通底している理念であり、その趣旨を深く理解し、学校内で共有することが重要となる。

読者モニターからは、「まず、学校が置かれている『地域』への理解を深めることが、学校が『社会』への意識を高めることにつながる」といった指摘もあり、自校にとっての「社会」を定義する必要もあるだろう。

視点2　資質・能力の3つの柱

資質・能力の3つの柱の育成について、その指導の進め方が課題だと言える。読者モニターからは、三位一体で捉える回答が多かったが、「柱の優先順位は、生徒の発達段階や特性、学習内容によって変化すると考える。知識がなくて議論ができないのならば知識・技能の習得が優先になるが、他者との議論で疑問が生じ、主体的に知識・技能を習得することもある」といった見解もあった。また、資質・能力の育成は長期的視野が必要だが、教師も生徒もすぐに結果を求めがちである点も課題になるといった指摘もあった。

視点3　資質・能力を育成する探究

生涯にわたって主体的に学び続ける態度を育むために、「探究」は重要だと言える。しかし、「探究」に対する教師間の理解はまちまちであり、まずは校内で共通理解を図ることが必要だ。

また、「『探究』は各教科の学びをつなぐ重要な役割を担う。知識の習得と探究の往還をスムーズにできれば、大学で研究を行う際の土台になる」という読者モニターの声もあった。生徒の学びをどうデザインするかがポイントになりそうだ。

視点4　学習評価

学習評価の実践にあたっては、数値で測り切れない力、中でも「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するかが課題だと言える。また、読者モニターからは、「生徒が自身の成長を教師とともに実感できるよう、ポートフォリオを充実させたい。しかし、すべての学びや活動を記録させようとすると両者の負担が大きいため、どう効果的に行うかが考えどころだ」といった、生徒の自己評価の重要性を指摘するとともに、その実践上の課題を挙げる声が多かった。

＊『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2018年4月にウェブとファクスで実施。回答数は119）

次ページからは、4つの視点のうち、視点2と3を踏まえた実践のあり方について、具体的な事例を通じて考え、さらに、P.20からは、高校の教師と大学の研究者との座談会を通じて、視点4を深める。